

論説

東晋初期における皇帝と貴族

はじめに

田 中 一 輝

永嘉元年（三〇七年）に建鄴（三二三年建康と改称）に安東大將軍・都督揚州江南諸軍事として出鎮した琅邪王睿は、愍帝が建興四年（三二六年）に漢の部将劉曜に降伏したのに伴い、翌年（三二七年）三月晋王となり、愍帝の死を受け、建武二年（三一八年）三月に皇帝に即位した（元帝）。東晋王朝の成立である。東晋初期の政治史については、川勝義雄・金民壽・田余慶の諸氏の研究によつて、東晋王朝や江南貴族制の成立過程が明らかにされている⁽¹⁾。

これらの東晋初期政治研究の特徴としては二点が挙げられる。第一に、北来貴族と江南豪族の対立関係への着目である。東晋政治史研究において焦点となったのは、江南における南北人対立や、当初軍事力や江南社会との地縁を持たなかった北来貴族が、いかにして実権を掌握したか、という問題などであった。それゆえ、例えば川勝氏

が、北来貴族の持つ、江南豪族を圧倒し得た要素として「華北風先進文化」・「郷論主義的イデオロギー」の存在を指摘したように、北来貴族の江南豪族に対する文化的優位性などに関心が集中していた。第二に、当時の皇帝に対する理解である。田余慶氏が、一般に魏晉南北朝「門閥政治」と称される政治は実際には東晉にしか存在せず、東晉における皇帝は貴族に利用された道具であって忠誠の対象ではなかった、と主張したように、東晉の皇帝権力は弱体化し、貴族勢力を制御するほどの実力を持たなかったという理解が一般的である。

東晉の政治において北来貴族が大きな力を持っていたことには異論の余地はないが、これについては、江南豪族との関係の分析により得られた成果ではあっても、必ずしも皇帝と北来貴族の関係について具体的に論じられた結果ではない。東晉初期においては元帝による法術主義政治が行われ（詳細は後述）、皇帝専制体制の構築が試みられたことがあるが、これについては、元帝期の一時的な現象に過ぎず、また法術主義政治は王敦の乱（後述）によって破綻し、それにより北来貴族による政治運営が確定的となった、という解釈が一般になされてきた。しかしながら、こうした理解には、東晉における皇帝と北来貴族の対立という構図が、無批判に前提とされているらしいがある。

東晉における皇帝とは、北来貴族の勢力縮小を望みながら、それに失敗した存在であったのか。もしそうでなければ、東晉の所謂「貴族政治」・「門閥政治」において、皇帝はどのような役割を果たしたのであるうか。これらの問題を解明するには、東晉の政治史を今一度分析する必要がある。本稿では、特に東晉初期における皇帝と貴族の関係を具体的に究明し、「貴族政治」・「門閥政治」と表現されてきた東晉初期政治の実態を解明することを目的とする。

とする。なお本稿の構成は次の通りである。第一章では元帝期の政治史の推移を整理・確認する。第二章では明帝期の政治史を論ずる。王敦の乱と皇帝・北来貴族の関係については、主に第二章で論ずることとしたい。

第一章 元帝期の政治

まずは、元帝期における政治の推移を整理・確認したい。

周知の通り、東晉王朝の成立には、王導・王敦を始めとする北来貴族や、顧榮・賀循らの江南豪族の双方の協力が欠かせなかった。東晉王朝の成立過程に関しては、既に川勝義雄・金民壽の両氏の研究がある。川勝氏は、陳敏の乱をほぼ独力で平定した江南豪族は、江南社会を安定化し、同時に「逆賊」の汚名を被ることを避けるため、永嘉元年（三〇七年）に江南にたどり着いた琅邪王睿を積極的に盛り立て、彼の有する権威を利用することをたくらんだが、江南豪族間相互のまとまりが強力ではなかったために、琅邪王睿とともに江南にあった北来貴族の王導により分断工作を施され、さらに江南に続々と流入する北方からの移民の圧力も影響し、結果、江南豪族は北来貴族に屈服し、江南において北来貴族を中心とする体制が構築された、とする。⁽⁵⁾ 金民壽氏は、これら北来貴族・江南豪族が琅邪王睿の軍府・公府に辟召された時期を区分し、江南において江南豪族を北来貴族が圧倒する過程を明確化した。⁽⁶⁾

こうした現象は健康一帯の長江下流域だけではなく、西方の長江中流域においても発生した。琅邪王睿は永嘉五年（三二年）に江州刺史華軼に対し攻撃を行うが、琅邪王睿より派遣された軍は、王敦（王導の従兄）を司令官と

し、宋典率いる琅邪王睿の禁衛隊的性格を持つ部隊（ただし小規模）や、周訪・陶侃がそれぞれ率いる南人の兵団から成っていた。華軼の滅亡後も、この軍はさらに西進を続け、巴蜀地方からの流民を率いる杜弢や、愍帝から派遣された荊州刺史第五猗などと戦ってこれを破り、荊州・江州・湘州を平定した。なお平定活動の過程で、王敦は軍の主力である南人兵団を率いた陶侃ら南人部将を政治力によって押さえ込んでいった。王敦はまず陶侃を広州刺史に左遷し、後任の荊州刺史に王廙を据えたが、これに反発した陶侃の旧部将の鄭攀・蘇溫・馬儁らは杜曾を迎えて王廙の赴任を拒んだ。⁽⁸⁾王敦は周訪を派遣してこれを平定したが、軍功を立てた周訪を梁州刺史に左遷させる。⁽⁹⁾このように、王敦は軍事行動にあたり陶侃・周訪らの部将を利用しつつ、彼らを左遷して軍功を独占した。その一方で、建康政府より冷遇された沈充・錢鳳らの呉興郡の豪族を軍府に辟召しており、このことは後の王敦の乱の一因となる。⁽¹¹⁾

このように、長江中・下流域では王導・王敦ら北来貴族による江南豪族・南人部将の圧服が行われた。しかし、これらの北来貴族も、琅邪王睿が長安の愍帝より建興元年（三一三年）に左丞相に任じられて以降は、次第にその力を削がれていくこととなる。琅邪王睿の左丞相府において、丞相司直に任命された劉隗は、北来貴族に対する弾劾を盛んに行った。例えば、左丞相府において右長史などをつとめていた周顗は、廬江太守の梁龕が妻の喪が明ける前日に催した宴会に参加したことを劉隗に弾劾され、一月分の減俸処分を受けた。⁽¹²⁾また劉隗は南中郎将の王含に對し、その辟召した幕僚の多くが不適格者であったことを弾劾している（しかしこれに関しては処分は下されなかった）。⁽¹³⁾建武二年（三一八年）の睿の即位後には、劉隗は御史中丞に遷り、刁協が尚書令に任命されたが、この刁協も、劉

隗と同じく貴族の権力削減に尽力した。⁽¹⁴⁾

元帝期に劉隗・刁協によって進められた政策は、法術主義に基づくものであった。金民壽氏は、劉隗による弾劾に二つの特徴を見出した。第一に、喪中に婚礼・宴会などを行った者に対する弾劾であり、氏はその目的を、放達を慕うことによって自浄能力を失っていた貴族社会における、清談（老莊談議）派から俗物視されていた清議（儒教的綱紀）の確立とする。第二には職務の放棄・過失に対する弾劾であり、これにより実務を忌避する放漫な貴族の勤務態度に対して、政務の能率化がはかられた、と金氏は見る。⁽¹⁵⁾劉隗の目的は、こうした弾劾を頻繁に行うことによって、貴族を完全に官僚化し、皇帝権の伸張に繋げ、皇帝専制体制を築き上げることにあったのであろう。さらに劉隗・刁協の法術主義的政治は、西方の王敦をも標的としていた。刁協の主導により解放奴隸を徵発して新たに軍が編制され、劉隗・戴淵が都督・將軍号を帯び、それぞれ新設の軍を率いて淮南・合肥に出鎮したことは、王敦の軍隊に對抗する意味も含まれていた。⁽¹⁷⁾このように、劉隗・刁協は法術主義的政治を展開させていったのであるが、彼らの登用は、主に元帝の意志によったものと思われる。例えば、『晋書』卷七三 庾亮伝に、

時に帝方に刑法を任^もじ、『韓子』を以て皇太子に賜^もう。⁽¹⁸⁾

とあるように、元帝は皇太子紹（後の明帝）に法家の書である『韓非子』を授けた。このことから、元帝の法術主義的政治への意欲をうかがうことができよう。劉隗・刁協は、こうした法術主義を志向した元帝により、その実施責任者として、登用されたのであろう。

しかし、元帝は劉隗・刁協らを重用して法術主義的政治を進める一方で、その標的となった王導ら北来貴族の失

脚を防いでもいた。劉隗・刁協の最大の標的は琅邪王氏一門であったが、その代表格である王導が失策などにより降格や退官を願い出たとき、元帝はこれを斥けている。例えば、太興二年（三一九年）八月に、王導の推薦により、後趙に寝返った太山太守徐龕討伐の指揮官となった太子左衛率羊鑒が敗れたとき、王導も罪を問われ、降格を願い出たが、元帝は詔によりこれを却下している⁽¹⁹⁾。また永昌元年（三三二年）に王敦が建康に侵攻した際、劉隗・刁協は王導以下琅邪王氏の族誅を奏請し、王導も一族の者二〇名余りを率いて罪を待ったが、元帝はこれを許している⁽²¹⁾。

以上は先行研究に基づいて整理した元帝期政治史の詳細であるが、この時期には北来貴族が劉隗・刁協らの法術主義官僚の圧力を被っていた。しかし、王導に対する元帝の姿勢からうかがえるように、元帝は一方で皇帝専制政治を目指しながらも、貴族の排除によってそれを実現させようとせず、かえって貴族を劉隗・刁協らによる圧力から保護していたのである。王導ら北来貴族に対する元帝の姿勢について、金民壽氏は、元帝は北来貴族の政治的能力と名声に負い、その既得権を全面的に認めることで江南に政權を樹立することができ、さらに北来貴族の代表格である王敦が、建康政府から閉め出された江南の武強豪族（沈充・錢鳳など）を支配下に入れ、軍權を掌握していたために、元帝の地位は安定していた⁽²²⁾と言いつく、それゆえに元帝の法術政策はデモンストレーションにとどまらざるを得なかった、と主張する。元帝は、法術政策により皇帝専制体制の構築を志しながらも、政權における北来貴族の利益を考慮せねばならず、北来貴族を排除しての専制体制構築をなしえなかったのである。

とは言え、皇帝専制体制構築の初期段階として、劉隗・刁協らが元帝の寵愛を受けたことにより台頭し、一時的ながら、王導らを圧倒するほどの權勢を得たことから、当時、皇帝との（私的な）関係の強弱が、貴族・官僚の

地位の昇降や權限の変化に影響を及ぼし得たことがわかるのであり、このことにも注意せねばならない。

周知の如く、元帝期の法術主義的政治は、永昌元年（三三二年）正月に発生した王敦の乱によって破綻する。建康政府軍は王敦に敗北し、劉隗は後趙に亡命し、刁協は江乘にて殺害される。また元帝も、同年閏月に死去する。唐長孺氏は、王敦の乱によって東晋における「君弱臣強」の体制が確定化したとする⁽²³⁾が、唐氏の説は必ずしも明帝期以降の政治史を分析して出されたものではなく、なお検討の余地がある。次章では、明帝期の政治を見ていきたい。

第二章 明帝と貴族

第一節 貴族と東宮

本章では、明帝期の政治について論ずるが、まずは明帝の皇太子時代における、彼を取り巻く環境について考察したい。

司馬紹（明帝）は、父である元帝睿がまだ琅邪王であった愍帝建興年間（三一三―三二七年）に東中郎將として広陵に出鎮し、睿が晋王となった建武元年（三二七年）に晋王太子となり（四月）、睿が皇帝に即位した太興元年（三一八年）に皇太子に冊立される（三月）。それに伴い、東宮が設立され、東宮官属が配置された。附表は、元帝期の東宮官属をまとめたものである。まずは、このうちの数名の経歴や元帝期における動向について、簡単に確認する。

附表 東晋元帝期東宮官属

人名	本貫	前職	東宮職	出典
王導	會稽山陰	散騎常侍・太常	散騎常侍・太常・行太子太傅	晋65、68
周顗	琅邪臨沂	侍中・司空・假節・録尚書・領中書監	侍中・司空・假節・録尚書・領中書監・領太子太傅	晋65
薛兼	汝南安成	吏部尚書(白衣領職)	吏部尚書・太子少傅	晋69
陸暉	丹陽	丹陽尹	尚書・領太子少傅	晋68
卞壺	吳郡吳興	散騎常侍・本郡大中正	太子詹事	晋77
庾亮	潯陽宛句	世子師	太子中庶子・散騎常侍・東宮侍講・太子詹事	晋70
溫嶠	潯陽鄱陽	參丞相(琅邪王睿)軍事	中書郎・領著作・東宮侍講	晋73
熊遠	太原祁縣	驃騎將軍(王導)長史	太子中庶子	晋67
褚翹	子章南昌	丞相(琅邪王睿)從事中郎	太子中庶子	晋71
顏含	河南陽翟	散騎郎	太子中庶子	晋77
鄧攸	琅邪臨沂	東陽太守	太子中庶子	晋88
阮孚	平陽襄陵	河東太守	太子中庶子	晋90
孔衍	陳留尉氏	散騎常侍	太子中庶子・太子左衛率	晋49
王嶠	魯國	長山令	中書郎・領太子中庶子	晋91
張禕	太原晉陽	丞相(琅邪王睿)掾	太子舍人(不拜)	晋75
孔坦	范陽方城	世子文學	太子舍人	晋36
卞敦	會稽山陰	世子文學	太子左衛率	晋78
羊鑒	洛陰宛句	鎮東大將軍(王敦)軍司	(累遷)太子左衛率	晋70
孔夷吾	太山	東陽太守	太子左衛率	晋65、81
周廷	魯國	侍中	太子右衛率	晋58
張茂	義興陽羨	黃門侍郎	太子右衛率	晋91
(不明)	琅邪王睿族属		太子右衛率	晋78

(注)『晋書』卷四九阮籍傳附阮放傳に、「(阮放)中興、除太學博士・太子中舍人・庶子。時雖戎車屢駕、而放侍太子、常說老莊、不及軍國。明帝甚友愛之」とあり、東晋建国後、阮放が太子中舍人・太子庶子を歴任したことが判明するが、この内容からは(本文中に引用した『太平御覽』卷二四五所引『晋中興書』、卷九八所引『晋陽秋』の内容から、明帝期の東宮のことである可能性が高いが)、元帝期・明帝期のいずれのことであるか判別できないため、附表には含めていない。なお、出典の晋とは『晋書』のことで、数字は巻数を示す。

・王導

王導は東晋建国後、驃騎大將軍・儀同三司に進み、さらに侍中・司空・假節・録尚書・領中書監となる。太興二年(三一九年)には、太常・行太子太傅であった、江南豪族の賀循が死去したことを受け、太子太傅を領するようになる。⁽²⁴⁾

・陸暉

陸暉は西晋の詩人である陸機・陸雲兄弟と同族の江南豪族である。初め陸暉は琅邪王睿に辟召されて祭酒(軍諸祭酒?)となり、さらに振威將軍・義興太守に任命されるが、病を理由に振威將軍・義興太守を辞退する。その後、散騎常侍・本郡大中正に累遷し、太興元年(三一八年)、太子詹事となる。⁽²⁵⁾ 陸暉のように元帝期に東宮官属を務めた江南豪族には、王導の前任の太子太傅である賀循や、尚書・領太子少傅の薛兼、太子舍人の孔坦などがある。

・卞壺

卞壺は潯陰宛句出身の北来貴族である。卞壺は郷里の青州の混乱に際し、妻の兄である徐州刺史の裴盾をたよって徐州におもむき、裴盾より行広陵相に任命され、その後、琅邪王睿の從事中郎となる。建興年間(三二三〜三二七年)に当時琅邪王世子であった紹が東中郎將として広陵に出鎮すると、卞壺はその長史となる。その後母が死去したため東中郎將長史を辞任するが、喪が明けるに伴い世子師に就任、太興元年(三二八年)に紹が皇太子に冊立されると、太子中庶子に任命され、さらに散騎常侍・東宮侍講に転じた後、太子詹事となる。⁽²⁶⁾ 東中郎將長史就任以降、太子詹事就任に至るまでの卞壺は、母の死去に伴う服喪という中断期間を除き、一貫して紹の近侍の職にあつた。

た。なお卞壹の従父兄である卞敦も、東晋建国後に太子左衛率となっている⁽²⁷⁾。

・温嶠

温嶠は太原祁出身の貴族であるが、もとは中国北辺に拠り、匈奴劉氏の漢（十六国の一つ）と戦っていた劉琨の府僚であった。劉琨は建興四年（三二六年）十一月に愍帝が漢に投降したのをうけ、建興五年（三二七年）三月、琅邪王睿へ即位を促すため、鮮卑の段匹磾と連名で『勸進表』を著し、温嶠を使者として建康に届けさせた⁽²⁸⁾。建康に到着し、『勸進表』を元帝に献上した後も、温嶠は劉琨のもとに戻らず、そのまま建康に滞在した。温嶠は以上のような経緯から建康に到達した新参の北来貴族であった。建康に到着した温嶠は、王導・周顗・謝鯤・庾亮・桓彝らの北来貴族に受け入れられ、まず散騎侍郎となり、続いて驃騎將軍王導の長史となった後、太子中庶子に就任する⁽³⁰⁾。以後の温嶠は、『晋書』卷六七の本伝に、

東宮に在るに及び、深く寵遇せられ、太子與に布衣の交わりを爲す⁽³¹⁾。

とあるように、皇太子紹の寵愛を受けるようになる。

・庾亮

庾亮は潁川鄱陵出身の北来貴族であり、一六歳のとき東海王越より辟召されるがこれを断り、父の庾琛にしたがって会稽におもむく。鎮東大將軍時代の琅邪王睿より辟召され、鎮東大將軍府の西曹掾に就任し、その後丞相参軍、参丞相軍事として、丞相府の書記をつかさどった。また妹の庾文君が司馬紹の妃となっている。琅邪王睿の皇帝即位後、庾亮は中書郎・領著作となり、さらに東宮侍講となる⁽³²⁾。庾亮は妹が皇太子妃となり、自身は東宮侍講となる

など、皇太子紹とは特に関係が深く、また『晋書』卷七三の本伝に、

（庾亮）温嶠と俱に太子布衣の好を爲す⁽³³⁾。

とあるように、温嶠と同様に、個人的な関係も良好であった。

この他、前章で紹介した周顗、かつて石勒の参軍を務めながらそのもとを離れ、後に新鄭の李矩に投降し、さらに許昌の荀組のもとにおもむき、そのまま江南に至った鄧攸や、孔子の子孫である孔衍などの人士が、元帝期に東宮官属となっていた。これらの東宮官属は様々な形で皇太子紹より寵愛を受けるようになる。例えば孔衍について、『晋書』卷九一の本伝に、

中興の初め、庾亮と俱に中書郎に補せらる。明帝の東宮に在るや、太子中庶子を領す。時に于いて庶事草創なるも、衍經學深博にして、又舊典を練識し、朝儀の軌制多く正を取る。是れに由り元・明二帝竝びに之を親愛す⁽³⁴⁾。

とあるように、「經學深博」であることを理由に、元帝・皇太子紹（明帝）の寵愛を受けていた。孔衍と皇太子紹の場合は儒学を基礎とした関係であったが、当時は清談や文学論議などをもとに皇太子紹との関係強化を行う東宮官属が多かった。『太平御覽』卷二四五に引く『晋中興書』に、

温嶠 太子中庶子を拜す。嶠の東宮に在るや、特に嘉寵せられ、僚屬與に比いを爲す莫し⁽³⁵⁾。嶠阮放等と共に太子に老莊を遊談するを勧め、教うるに經史を以てせず。太子甚だ之を愛す。

とあり、太子中庶子となり、皇太子紹の寵愛を受けていた温嶠は、阮放らとともに、皇太子紹に經書・史書を教え

ず、老莊の談論（清談）を勧めた。さらに『太平御覽』卷九八に引く『晋陽秋』に、

明帝 文武鑒斷にして、初め東宮に在り、賢士に敬禮し、明德に昵近す。王導・庾亮・溫嶠・桓彝・阮放より皆な親待せられ、分好綢繆たり。辭章談論を雅好し、理義を辨明し、二三の君子と並びに持論を著し、粲然として觀るべし。時に于いて東宮號して多士と爲す。⁽³⁶⁾

とあるように、皇太子紹は東宮における談論を通じて、王導・庾亮・溫嶠・桓彝・阮放らと親密になっていた（ただし桓彝については、史料上に東宮官属をつとめたとする記述がない。阮放については附表末尾の注を参照）。

当時の東宮においては、東宮官属をつとめた貴族が、儒学や清談などを通じて、皇太子紹との私的関係を構築した。⁽³⁷⁾ ここで育まれた関係は、皇太子紹の即位後（明帝）の各東宮官属のその後の地位に、多大な影響を及ぼすこととなる。

第二節 王敦の乱における明帝と北来貴族

既に述べたように、元帝の法術主義的政治は、王敦の乱によって終焉を迎えた。永昌元年（三三二年）正月、王敦は劉隗の誅殺を名目に掲げ、武昌にて挙兵し、建康に向け進軍する（第一次挙兵）。四月には建康北西の石頭城への入城を果たし、刁協は江乘に逃れた後に殺害され、劉隗は後趙に亡命する。また周顗や驃騎將軍の戴淵なども王敦に殺害された。劉隗が亡命し、刁協が殺害されたことで、腹心を失った元帝の法術主義政策は完全に破綻し、その元帝自身も、同年閏月に死去する。元帝の死の直後、皇太子紹が即位する（明帝）。王敦は太寧元年（三三三年）四月にいったん于湖に撤退するが、⁽³⁸⁾ その後は外部から建康政府の施政に干渉することとなる。即位当初の明帝は、

王敦の干渉のため、その施政において自己の意思を充分に貫徹させることはできなかったのであるが、初期の明帝の施政方針には、主に二点の特色がある。

第一に、旧東宮官属の重用である。前節にて述べたように、元帝期に東宮にあった明帝は、主として溫嶠・庾亮のような東宮官属を寵愛していたが、即位以後、これらの旧東宮官属を腹心として重用する方針をとるようになる。例えば、『晋書』卷六七 溫嶠伝に、

明帝即位するや、侍中を拜し、機密大謀は皆な參綜する所にして、詔命文翰も亦た悉く焉に豫る。⁽³⁹⁾

とあるように、溫嶠は明帝の即位直後に侍中となり、政府の機密・詔令の作成に参与した。しかし王敦は、こうした明帝やその腹心たちの動向を危惧し、圧力をかけるようになる。溫嶠は侍中ののち、中書令に転任しているが、⁽⁴⁰⁾ 王敦は、明帝の信任を受け、侍中・中書令といった要職を歴任する溫嶠を忌み、まず明帝に自身の丞相府の左司馬とするよう要請し、さらに偽って王敦に接近した溫嶠を建康政府の監視役とするため、これを丹楊尹としている。⁽⁴¹⁾

第二に、南下した北来兵団、特に郗鑒の兵団との接触である。周知の通り、東晋は建国以前の建興元年（三三三年）に始まる祖逖の北伐により、⁽⁴²⁾ 当時漢の部将であった石勒の勢力を建康から遠ざけたのであるが、太興四年（三三二年）九月に祖逖が死去したのを契機として、⁽⁴³⁾ 巻き返しをはかった石勒は、祖逖亡き後の東晋軍に攻勢をかける。それに伴い、祖逖の弟である祖約や、彭城の劉遐、鄒山の郗鑒の兵団が建康方面へ退却する。これに蘭陵相蘇峻の兵団を加えたこれらの北来兵団は、石勒の攻勢をきっかけとして建康近辺に駐屯するようになった。明帝は、この

うちの郗鑒の兵団を「外援」とすることを決め、郗鑒を安西將軍・兗州刺史・都督揚州江西諸軍事に任命するが、

これを憂慮した王敦の上表により、建康に召還されて尚書令に就任する。⁽⁴⁵⁾

以上のように、明帝は即位してより温嶠ら旧東宮官属の重用と、郗鑒の兵団の利用などの方針を、既に固めていたのであるが、そのいずれもが王敦の妨害に遭っている。よって明帝・建康政府の当面の課題は、王敦勢力の討伐にあった。

建康政府の中でも反王敦の急先鋒は、他ならぬ明帝であった。永昌元年（三三三年）の王敦の第一次挙兵の際、当時皇太子であった明帝は、王敦との決戦を試みたが、太子中庶子の温嶠に諫められて思いとどまっており、また即位後の太寧二年（三三四年）六月、王敦が再び建康への侵攻をはかったときには、明帝は自ら単騎で王敦軍の偵察を行っていた。⁽⁴⁷⁾この間、王敦から建康政府の監視役たることを望まれた温嶠は、逆に王敦の反逆の陰謀を明帝に告げ、これへ備えることを要請し、庾亮とともに王敦討伐を計画した。その後明帝は王敦の死を公表し（実際には王敦はこの時点では生存しており、太寧二年七月に死去する）、王敦軍残党の討伐を下命する。⁽⁴⁸⁾一方の王敦は、配下の銭鳳・鄧嶽・周撫らを将とする三万の軍を建康に派遣し、兄の王含を元帥に任命した。⁽⁴⁹⁾王敦軍が進攻を開始し、建康政府はこれへの対処を迫られたのであるが、建康政府がこのとき王敦軍に対抗しうる軍勢力として期待したのは、蘇峻・劉遐らの北来兵団であった。実際に尚書令として建康にあった郗鑒は、蘇峻・劉遐の兵団を召還し、建康の防備にあてることが提案しており、太寧二年（三三四年）七月、蘇峻・劉遐の兵団は、建康政府軍と王敦軍の前哨戦の最中に建康に到着する。⁽⁵¹⁾蘇峻・劉遐の兵団を迎え入れた建康政府軍は、明帝の指揮のもとで戦い、建康に接近した王含・銭鳳・沈充の軍の撃退にひとまず成功する。

次に明帝は、敗走する王含らの追撃に取りかかる。敗戦後、王含は淮南へ、銭鳳は江寧へ、沈充は呉興に、それぞれ逃れたのであるが、王敦の乱の完全平定には、残党である彼らの掃討が必要であった。しかし、建康を離れた場所での軍事行動に、劉遐・蘇峻の北来兵団を使用することには、いくらかの危険性があった。もとよりこうした北来兵団の多くは、その東晋王朝への帰属の経緯から、⁽⁵²⁾建康政府との関係が強固ではなかったため、政府の命令を兵団が無視する可能性があった。王含らの平定にあたり、各兵団の統率を徹底させる必要に迫られた明帝は、ここで腹心を各兵団に送り込むという方法をとる。

劉遐の兵団は、江寧にて銭鳳の追撃にあたっていたが、その作戦行動は、劉遐一人によって進められたものではなかった。『晋書』卷六七 温嶠伝に、

（温嶠）復た劉遐を督して銭鳳を江寧に追う。⁽⁵³⁾

とあるように、劉遐の兵団は中壘將軍であった温嶠の監督を受けている。またこれとは別に、劉遐は淮南にて王含の追撃にあたっているが、このときも『晋書』卷八一 劉遐伝に、

含の敗るるや、（劉遐）丹楊尹温嶠に随い、追いて淮南に至り、遐頗る兵を放ち虜掠す。嶠曰く、「天道順を助け、故に王含剿絶すれば、亂に因りて亂を爲すべからざるなり」と。遐深く自ら陳べて拜謝す。⁽⁵⁴⁾

とあるように、温嶠の監督下に入っており、さらに劉遐の兵団が掠奪を行った際、温嶠は劉遐にこれを戒めている。

一方の蘇峻の兵団は、呉興に敗走した沈充の平定に向かっていているが、『晋書』卷一〇〇の本伝に、

（蘇峻）又庾亮に随い追いて沈充を破る。⁽⁵⁵⁾

とあるように、庾亮の監督を受けている。このように、一連の掃討戦において、温嶠・庾亮は、明帝・建康政府と北来兵団の仲介役を担っていたのである。⁽⁵⁶⁾ 北来貴族の中でも特に彼ら二人がこの任に選ばれた根拠が、明帝の皇太子時代以来の私的関係であったことは、容易に推測されよう。また、建康政府と北来兵団を繋いだものが、明帝と北来貴族の私的関係であったことは、乱平定の主導権が明帝にあったことを、あらためて示している。

第三節 太寧二年七月の論功行賞

かくして王敦の乱は平定され、太寧二年（三二四年）七月、明帝は論功行賞を実施する。

司徒王導を封じて始興郡公と爲し、邑三千戸、絹九千匹を賜う。丹楊尹温嶠は建寧縣公、尚書卞壺は建興縣公、中書監庾亮は永昌縣公、北中郎將劉遐は泉陵縣公、奮武將軍蘇峻は邵陵縣公、邑は各おの千八百戸、絹は各おの五千四百匹。尚書令郗鑒は高平縣侯、護軍將軍應詹は觀陽縣侯、邑は各おの千六百戸、絹は各おの四千八百匹。建威將軍趙胤は湘南縣侯、右將軍卞敦は益陽縣侯、邑は各おの千六百戸、絹は各おの三千二百匹。其餘の封賞は各おの差有り。⁽⁵⁷⁾（『晋書』卷六 明帝紀 太寧二年七月条）

『晋書』明帝紀は、王導が郡公に、温嶠・卞壺・庾亮・劉遐・蘇峻が県公に、郗鑒・應詹・趙胤・卞敦が県侯に、それぞれ封ぜられたとする。このうちの、例えば劉遐・蘇峻が県公に封ぜられたのは、自らの兵団を率いて建康政府に加勢したことによるのであろう。また郗鑒は劉遐・蘇峻の召還を提案したことが評価され、県侯に封ぜられたものと思われる。その他の應詹・趙胤・卞敦は、全て建康政府軍の一員として王敦軍の討伐に従事しており、それ

ぞれの軍功に応じて県侯に封ぜられたのであろう。⁽⁵⁸⁾ しかし、『太平御覽』卷二〇〇所引『晋中興書』には、

明帝 錢鳳を平らぐるの功を以て、（王導を）始興公に、温嶠を建寧公に、庾亮を永昌公に、郗鑒を南平公に、卞壺を建興公に、蘇峻を邵陵侯に、劉泉（遐？）を泉陵侯に、應詹を觀寧侯に、卞郭（敦）を益陽侯に、趙胤を湘南侯に封ず。⁽⁵⁹⁾

とあり、郗鑒の封爵は公爵に、蘇峻・劉遐は侯爵となっている。『晋中興書』を信用するのであれば、彼らの召還を提案した郗鑒の功績は、自己の兵団を率いて王敦軍と戦った劉遐・蘇峻のそれよりも高く評価されたことになる。このように、論功行賞の実態を把握するには、以上のような史料的問題があるのだが、しかし『晋書』明帝紀と『晋中興書』のいずれもが、王導・温嶠・庾亮・卞壺の封爵を公爵に、應詹・卞敦・趙胤を侯爵としており、特に、王導・温嶠・庾亮・卞壺に対する評価が非常に高いことが判明する。

王導は王敦軍の討伐において、大都督として諸軍を統率しており、⁽⁶⁰⁾ 温嶠と庾亮は、前述の通り、それぞれ劉遐・蘇峻の各兵団を率いて王敦軍の残党の掃討を行っている。さらに『魏書』卷九六 僭晋司馬叡伝に、

敦の疾甚だしく、紹其司徒王導・中書監庾亮・丹陽尹温嶠・尚書卞壺を召し密かに之を討つを謀る。導・嶠及び右將軍卞敦 共に石頭に據り、光祿勳應詹は都督朱雀桁南諸軍事、尚書令郗鑒は都督從駕諸軍事たり、紹出でて中堂に次る。⁽⁶¹⁾

とあり、明帝（紹）は王導・温嶠・庾亮・卞壺と王敦討伐を密議し、⁽⁶²⁾ 卞敦は王導・温嶠とともに石頭城に駐屯し、應詹・郗鑒はそれぞれ都督となり、明帝自身は中堂に駐屯していたことがわかるが、ここで密議に与ったとされる

王導・溫嶠・庾亮・卞壺は、全員が旧東宮官属であり、戦後に公に封ぜられている。

この四名の旧東宮官属のうち、王導・溫嶠・庾亮の三名は、前述の通り東宮における談論などを通じて当時皇太子であった明帝との関係を構築したのであるが、卞壺に関しては事情が異なる。卞壺は、『晋書』卷七〇の本伝に、
壺榦實もて官に當り、褒貶を以て己が任と爲し、吏事に勤め、正を軌し世を督さんと欲し、苟しくも時好に同じくするを肯んぜず。然して性弘裕ならず、才意に副わず、故に諸もろの名士の少とする所と爲り、而して卓爾の優譽無し。⁽⁶³⁾

とあるように、その性格から、周囲の名士（主に北来貴族を指すと思われる）との関係は必ずしも良好ではなく、当時の北来貴族の間で流行していた放達・浮華の風潮にも批判的であった。⁽⁶⁴⁾しかし卞壺は、明帝の即位後、吏部尚書に就任しており、中軍將軍として王敦討伐に従事した後は、領軍將軍となり、さらに太寧三年（三二五年）七月には尚書令に就任する。⁽⁶⁵⁾明帝期を通じて卞壺は要職を歴任したが、『晋書』本伝に、

明帝深く之を器とし、諸もろの大臣に於いて最も職を任す。⁽⁶⁶⁾

とあるように、その理由は明帝から信頼されたためであった。明帝がことさらに北来貴族の中でも孤立していた卞壺を重用したのは、卞壺の能力や政治に対する姿勢を評価してのことでもあろうが、その他に、卞壺が東中郎將長史就任以来、長く明帝の側近を務めていたという、元帝期における卞壺の官歴も理由の一つであったと思われる。前章で述べた通り、卞壺は東中郎將長史↓（服喪）↓世子師↓太子中庶子↓散騎常侍・東宮侍講↓太子詹事というように、明帝が皇太子に冊立される以前より、東中郎將府の長史や世子師、東宮官属などの近侍の職を長期間にわ

たつて務めているため、明帝と卞壺の間には、王導・溫嶠・庾亮らとは異質の関係が形成されたと考えられる。

乱の平定後の論功行賞は、当然、北来兵団の指揮・監督や、密議への参与など、それぞれの功績を充分に査定した上でなされたのであろうが、しかし確実に郡公・県公に封ぜられたと判断できる王導・溫嶠・庾亮・卞壺の四名は、全員が元帝期に皇太子時代の明帝と関係の深かった東宮官属であったため、軍功の査定に際し、明帝は自身の寵愛する貴族を特に高く評価した可能性もある。ただしこれらはいくまで功績に応じた爵位の授与であって、地位や権限の変化を直接的に示すものではなく、例えば溫嶠のように、乱の前後においてその官職に大きな変化が見られない者もあり、⁽⁶⁷⁾また庾亮のように授爵を辞退した者もあった。⁽⁶⁸⁾しかし彼ら旧東宮官属の、王敦軍平定の功績が、このように高く評価されたことは、東晋朝廷における彼らの存在感を、飛躍的に高めたように思われる。

第四節 顧命の指名

王敦の乱が平定された翌年（三二五年）閏八月、明帝は死去する。その直前、『晋書』卷六 明帝紀 太寧三年閏月条に、

壬午、帝不念たり、太宰西陽王羣・司徒王導・尚書令卞壺・車騎將軍郗鑒・護軍將軍庾亮・領軍將軍陸曄・丹楊尹溫嶠 並びに遺詔を受け、太子を輔せしむ。⁽⁶⁹⁾

とあるように、宗室の西陽王羣や、北来貴族の王導・卞壺・郗鑒・庾亮・溫嶠、江南豪族の陸曄に遺詔を与え、顧命の臣に任じ、皇太子衍（後の成帝）の輔佐を命じた。明帝が顧命に彼らを選んだ理由は何だったのであろうか。

王導・庾亮・溫嶠・卞壺の四名に関しては、ここまで論じてきたように、かつて東宮官属を務め、明帝に重用された者たちである。宗室の西陽王業に関しては、『晋書』卷五九の本伝に、

明帝の即位するや、業の宗室元老なるを以て、特に之が爲に拜す。業兵士の劫鈔を放縱し、所司業の官を奏免するも、詔して問わす。⁽⁷⁰⁾

とあるように、宗室の長老格であり、配下の兵士が略奪をはたらき、所司により業を免官しよう上奏されたときも、明帝は詔を下し不問に付しており、ここから、当時の朝廷における西陽王業の立場がうかがえる。⁽⁷¹⁾その他、車騎將軍の郗鑒については、かつて王敦軍討伐に先立ち、明帝が「外援」として安西將軍・兖州刺史・都督揚州江西諸軍事に任命したことからうかがえるように、もとより明帝の郗鑒に対する信頼は厚かった（また郗鑒は王敦の乱平定後に車騎將軍・都督徐兖青三州軍事・兖州刺史・仮節として、広陵に赴任していた）。江南豪族の陸暉が顧命に指名された理由に関して、考えられる点はいくつかある。まず第一に、陸暉がかつて東宮官属であったことである。前述のとおり、陸暉は皇太子紹の東宮にて太子詹事を務めたことがある。第二には、中央軍との関係である。当時陸暉は領軍將軍であったが、東晋における領軍將軍とは中央軍の長官であり、⁽⁷²⁾皇帝の死去という事態に際し、朝廷や中央軍の動揺を未然に防ぐ目的から、陸暉に特別の待遇が与えられたとも考えられる。⁽⁷³⁾この他、顧命の指名が行われる直前の同年八月に、明帝は孫吳時代の將軍・大臣・名賢の子孫を推薦するよう州郡の中正に命じているが、⁽⁷⁴⁾この直後に陸暉が顧命に指名されたことは、それと関係した、江南豪族登用（江南豪族の動揺や江南の不安定化を防止するための施策か）の一環であった可能性もある。

顧命に指名された者の多くは明帝より寵愛された貴族などであったが、一方では陸暉のように、明帝死後の体制に対する政治的配慮のように見られる人選もある。そもそも、明帝が顧命の臣を指名する動機となったのは、当時明帝の寵愛を受けていた宗室の南頓王宗と、元帝の外戚である虞胤が、西陽王業とともにクーデターを企図し、それを憂慮した庾亮が、病床にあった明帝にこれを直訴したことである。⁽⁷⁵⁾しかし明帝は庾亮の訴えを受け入れ、王導らとともに庾亮を顧命に指名したものの、同時に顧命に西陽王業を含めている。顧命選定のそもその動機が、西陽王業らの動向に対する庾亮の危惧であったにもかかわらず、西陽王業が顧命の臣に選ばれたのである。それゆえ、顧命の臣の選定は、これら七名が相互に推薦しあつてなされたのではなく、あくまで明帝の意志によって行われたと考えるべきであろう。

彼らが顧命の臣に選ばれた基準の一つに、明帝との関係の強さがあったことは、充分に考えられる。それによって温嶠・庾亮といった、言わば「新興貴族」が、遺詔を受け、皇太子の輔佐を命じられるまでに台頭した。しかし明帝は皇太子時代より関係の良かった貴族を重用しながら、彼らと対立する宗室（西陽王業）をあえて顧命に選んだのであり、ここから、明帝に北来貴族のみに政治を委任する意志がなかったことが推察され、さらには貴族・宗室のバランスを保ち、自身の死後の体制における顧命の臣のうち一人の独裁を防ごうとする、明帝の配慮であった可能性もあろう。こうした政治運営は、明帝個人の意志や力量によるところが大きかったのであるが、一方で、そのもとで台頭し、皇太子の輔政を任されたのは北来貴族や陸暉などの江南豪族であったのであり、例えば、これらに対抗しうる寒門・寒人層の台頭が促されることなどは起こらなかった。この点を踏まえれば、こうした明帝期の

政治は、あくまで当時確立しつづつあった江南貴族制の上に成立していたのであり、これが江南貴族制を克服・否定し、皇帝専制政治という方向に発展する可能性は、少なかったと考えられる。⁽¹⁷⁾

おわりに

東晋初期においては、確かに江南貴族制が徐々に確立しつづつあった。しかしながら、当時の皇帝は政治的に無力な存在であったのではなく、また決して北来貴族と必然的に対立する存在ではなかった。特に明帝は、北来貴族などとの私的関係を利用し、政治の主導権の掌握を達成したのであり、また北来貴族のなかには、その私的関係をもとに地位を向上させた者もあったのである。

まず元帝は劉隗・刁協といった法術主義官僚を重用し、彼らは元帝期を通じて王導ら北来貴族に政治的圧力を加える。元帝の死後に即位した明帝は、王導ら北来貴族との関係を強化した。元帝期に東宮官属をつとめた北来貴族(温嶠・庾亮など)は、明帝の即位以後、かつての東宮における私的関係をもとに、王敦の乱の平定などを通じて台頭することとなる。特に建武元年(三二七年)によりやく建康にたどり着いた、新参の北来貴族である温嶠が、わずか一〇年足らずのうちに、明帝より顧命を託されるほどに地位を高めたことは、その好例となろう。このように、元帝期・明帝期においては、貴族・官僚の地位の昇降に、皇帝との私的な繋がりの強弱が、少なからず関係していたのである。特に明帝の場合、こうした私的関係は、単に貴族の地位を上げただけではなく、例えば、王敦の乱に際し、本来建康政府との関係が薄い劉遐・蘇峻の各北来兵団を戦線に投入する際に、建康政府とこれらの兵団の連

携のために、温嶠・庾亮がそれぞれ北来兵団に送り込まれたことなど、実際の政治・軍事においても大きな意味を持っていた。またこうした関係を育んだ当時の東宮の存在意義にも、あらためて注目する必要がある。

明帝は江南貴族制が成立しつづつあった時代において政治の主導権を握ることに成功し、自らの死の直前にあって、庾亮ら旧東宮官属と関係の悪かった宗室の西陽王業を顧命に選定するなど、旧東宮官属の要望に反することを行うこともあった。しかしそうして構築された体制は、明帝個人の能力に依存した、極めて脆弱なものであり、明帝がわずか三年の治世の後に死去したこともあって、皇帝専制政治へ発展する要素にはなりえなかった。

なお明帝の子である成帝の即位とともに、西陽王業が庾亮により弋陽郡王におとされるなど、⁽⁷⁸⁾顧命の臣相互の間で対立が激化するようになり、また王導と庾亮の対立などに見られるように、旧東宮官属の間に亀裂もあらわれるようになる。さらに咸和二年(三三七年)には蘇峻の乱が勃発する。江南貴族制が最終的に確立されるのは、蘇峻の乱の平定を待たなければならず、それに関する考察も別に必要となるのであるが、それについては稿を改めて論じたい。

註

(1) 川勝義雄「孫呉政権の崩壊から江南貴族制へ」(『東方学報』京都四四、一九七三年、同氏著『六朝貴族制社会の研究』岩波書店、一九八二年、一四三～二二〇頁)、金民壽「東晋政権の成立過程——司馬睿(元帝)の府僚を中心

として——」(『東洋史研究』四八—二、一九八九年)、田余慶「東晋門閥政治」(北京大学出版社、一九八九年)参照。なお、東晋時代について、川勝氏は「東晋貴族制の成立過程——軍事的基礎の問題と関連して——」(前掲『六朝貴族制社会の研究』二二—二五五頁)において、「華

北から亡命してきた貴族たちを中心として、これに若干の江南土着の名門豪族が加わり、それらの貴族階層が本質的に文人的性格をもちながら政治・経済・文化はもとより軍事の面にいたるまで、社会のあらゆる面においてヘゲモニーを握ることができた時代」と解釈し、ここで東晋（江南）における貴族階層の在り方（貴族制）が指摘されている。川勝氏はこの論文においては、これを「東晋貴族制」と呼んでいるが、本稿では氏の前掲論文「孫呉政権の崩壊から江南貴族制へ」にならい、「江南貴族制」と呼ぶことにしたい。

(2) 川勝義雄「孫呉政権の崩壊から江南貴族制へ」（前掲註（1））、金民壽「東晋政権の成立過程」（前掲註（1））などは北来貴族と江南豪族の対立を強調し、前者が後者を圧倒する過程を描き出したが、これに対して東晋における北人・南人の融和を強調する立場をとるのが矢野主税氏である。矢野主税「東晋初頭政権の性格の一考察」（社会科学論叢）一四、一九六五年、「東晋における南北人対立問題——その政治的考察——」（『東洋史研究』二六—三、一九六七年）参照。

(3) 田余慶「東晋門閥政治」（前掲註（1））「自序」、「釈王与馬共天下」（同書一—三七頁）参照。

(4) 王敦の乱については、高須国臣「王敦の叛乱について」（『愛知大学文学論叢』三六、一九六八年）、唐長孺「王敦之乱与所謂刻碑之政」（同氏著『魏晋南北朝史論拾遺』中華書局、一九八三年、一五一—一六七頁）、魏斌「王敦三考——讀『晋書』札記之一」（『魏晋南北朝隋唐史資料』一八、二〇〇一年）、陳啓雲・羅驥「社会名望与權力平衡——解説王敦之乱」（『史学月刊』二〇一〇—）参照。

(5) 川勝義雄「孫呉政権の崩壊から江南貴族制へ」（前掲註（1））参照。

(6) 金民壽「東晋政権の成立過程」（前掲註（1））参照。

(7) 『資治通鑑』卷八七 永嘉五年六月条参照。

(8) 『晋書』卷六六 陶侃伝参照。

(9) 『晋書』卷五八 周訪伝参照。

(10) 『晋書』卷九八 王敦伝参照。

(11) 川勝義雄「東晋貴族制の確立過程」（前掲註（1））参照。

(12) 『晋書』卷六九 劉隗伝参照。

(13) 『晋書』卷六九 劉隗伝参照。

(14) 『晋書』卷六九 劉隗伝参照。

(15) 金民壽「東晋政権の成立過程」（前掲註（1））参照。

(16) 『晋書』卷六九 刁協伝参照。

(17) 『晋書』卷六九 劉隗伝、川勝義雄「東晋貴族制の確立過程」（前掲註（1））、唐長孺「王敦之乱与所謂刻碑之政」（前掲註（4））参照。

(18) 時帝方任刑法、以「韓子」賜皇太子。

(19) 『晋書』卷六五 王導伝参照。

(20) 『晋書』卷六九 劉隗伝参照。

(21) 『晋書』卷六五 王導伝参照。

(22) 金民壽「東晋政権の成立過程」（前掲註（1））参照。

(23) 唐長孺「王敦之乱与所謂刻碑之政」（前掲註（4））参照。

(24) 『晋書』卷六五 王導伝参照。

(25) 『晋書』卷七七 陸曄伝参照。

(26) 『晋書』卷七〇 卞壺伝参照。

(27) 『晋書』卷七〇 卞壺伝附下敦伝参照。

(28) 『晋書』卷六二 劉琨伝、卷六七 溫嶠伝、『文選』卷三七 劉越石（劉琨）「勸進表」参照。

(29) 『晋書』卷六七 溫嶠伝「王導・周顗・謝琨（琨）・庾亮・桓彝等竝與親善」。

(30) 『晋書』卷六七 溫嶠伝参照。

(31) 及在東宮、深見寵遇、太子與爲布衣之交。

(32) 『晋書』卷七三 庾亮伝参照。

(33) 與溫嶠俱爲太子布衣之好。

(34) 中興初、與庾亮俱補中書郎。明帝之在東宮、領太子中庶子。于時庶事草創、衍經學深博、又練識舊典、朝儀軌制多取正焉。由是元・明二帝竝親愛之。

(35) 溫嶠拜太子中庶子。嶠在東宮、特見嘉寵、僚屬莫與爲比。嶠與阮放等共勸太子遊談老莊、不教以經史。太子甚愛之。

(36) 明帝文武鑒斷、初在東宮、敬禮賢士、昵近明德。自王導・庾亮・溫嶠・桓彝・阮放皆見親待、分好綢繆。雅好辭章談論、辨明理義、與二三君子竝著持論、粲然可觀。于時東宮號爲多士。

(37) さきに元帝が皇太子紹に「韓非子」を授与したことを紹介したが、そのときのこととして、『晋書』卷七三 庾亮伝に、「亮諫以申韓刻薄傷化、不足留聖心、太子甚納焉」とあり、元帝より「韓非子」を賜与された皇太子紹を、庾亮は諫めている。

(38) 『晋書』卷六 明帝紀 太寧元年四月条参照。

(39) 明帝即位、拜侍中、機密大謀皆所參綜、詔命文翰亦悉豫焉。

(40) 『晋書』卷六七 溫嶠伝参照。

(41) 『晋書』卷六七 溫嶠伝参照。

(42) 祖逖の北伐については、『晋書』卷六二祖逖伝、『資治通鑑』卷八八愍帝建興元年八月条、越智重明「東晋朝中原恢復の一考察」(『東洋學報』三八一、一九五五年)、楊德炳「論祖逖と北伐」(『武漢大學學報(社会科学版)』一九八五—二)、李智文「祖逖北伐新論——兩晋・後趙比較研究」(『邢台師範高專學報(綜合版)』一九九六—三)を参照。

(43) 『晋書』卷一〇五石勒載記下参照。

(44) 『晋書』卷六元帝紀永昌元年七月条、同永昌元年十月条、卷六明帝紀太寧二年正月条、卷八一劉遐伝参照。

(45) 『晋書』卷六七郝鑒伝、川勝義雄「東晋貴族制の確立過程」(前掲註(一))参照。

(46) 『晋書』卷六明帝紀参照。

(47) 『晋書』卷六明帝紀太寧二年六月条参照。

(48) 『晋書』卷九八王敦伝、『資治通鑑』卷九三太寧二年五月条参照。

(49) 『晋書』卷九八王敦伝参照。

(50) 『晋書』卷一〇〇蘇峻伝参照。

(51) 『晋書』卷六明帝紀太寧二年七月条参照。

(52) それぞれの東晋への帰属の経緯については、『晋書』卷一〇〇祖約伝、同蘇峻伝参照。

(53) 復督劉遐追破沈充。

(54) 含敗、隨丹楊尹溫嶠追合至于淮南、遐頗放兵虜掠。嶠曰、「天道助順、故王含剿絶、不可因亂爲亂也」。遐深自陳而拜謝。

(55) 又隨庾亮追破沈充。

(56) 溫嶠・庾亮がそれぞれ劉遐・蘇峻の各兵団を監督し得たのは、おそらく都督号によるものだろう。溫嶠は当時都督東安北部諸軍事であり(『晋書』卷六七溫嶠伝)、庾亮は都督東征諸軍事であった(『晋書』卷七三庾亮伝)。なお東晋の都督制については、小尾孟夫「晋代における將軍号と都督」(『東洋史研究』三七—三、一九七八年、同氏著『六朝都督制研究』漢水社、二〇〇一年、五三—八七頁)、「東晋朝における多州都督制」(『史学研究』一五一、一九八一年、前掲『六朝都督制研究』八八—一二〇頁)、「東晋における征討都督」(前掲『六朝都督制研究』一七五—一二頁)を参照。

(57) 封司徒王導爲始興郡公、邑三千戸、賜絹九千匹。丹楊尹溫嶠建寧縣公、尚書下壺建興縣公、中書監庾亮永昌縣公、北中郎將劉遐泉陵縣公、奮武將軍蘇峻邵陵縣公、邑各千八百戸、絹各五千四百匹。尚書令郝鑒高平縣侯、護軍將軍應詹觀陽縣侯、邑各千六百戸、絹各四千八百匹。建威將軍趙

胤湘南縣侯、右將軍卞敦益陽縣侯、邑各千六百戸、絹各三千二百匹。其餘封賞各有差。

(58) 庾亮は明帝による王敦討伐下命の後、護軍將軍に任命され、建威將軍の趙胤らを率い、王敦軍部將の杜弢を斬るなどの功績を挙げている(『晋書』卷七〇庾亮伝)。卞敦は王敦の上表により、征虜將軍・都督石頭諸軍事に就任していたが、後に明帝より鎮南將軍(『晋書』明帝紀は右將軍とする)に任命され、王敦討伐に従事する(『晋書』卷七〇卞敦伝附卞敦伝、卷九八王敦伝)。

(59) 明帝以平錢鳳功、封始興公、溫嶠建寧公、庾亮永昌公、郝鑒南平公、卞建興公、蘇峻邵陵侯、劉泉泉陵侯、應詹觀寧侯、卞郭益陽侯、趙胤湘南侯。

(60) 大都督については、小尾孟夫「西晋における『大都督』」(前掲註(56))『六朝都督制研究』一五一—一七四頁、張鶴泉「西晋大都督考略」(『古籍整理研究學刊』二二〇—二一四)を参照。

(61) 敦疾甚、紹召其司徒王導・中書監庾亮・丹陽尹溫嶠・尚書卞壺密謀討之。導・嶠及右將軍卞敦共據石頭、光祿勳應詹都督朱雀桁南諸軍事、尚書令郝鑒都督從駕諸軍事、紹出次于中堂。

(62) このうち溫嶠・庾亮の密議(王敦討伐の計画)につい

ては前述したが、王導と明帝の密議については、『建康実

録』卷六肅宗明皇帝紀太寧二年七月条に「帝躬率六軍、出次南皇堂、欲討之。知其爲物情所畏、密與王導謀曰、「自上人情業業、皆仗敦爲勢、若聞其斃、衆必危殆、因而擊之、可破矣」とある。また密議に参加した者は王導・溫嶠・庾亮・卞敦以外にもいた。『晋書』卷七四桓彝伝「明帝將伐王敦、拜彝散騎常侍、引參密謀。及敦平、以功封萬寧縣男」、「北堂書鈔」卷六四注所引『晋中興書』「紀瞻受領軍、會錢鳳作逆、詔上殿參定謀策事」。

(63) 壺榦實當官、以褒貶爲己任、勤於吏事、欲軌正督世、不肯苟同時好。然性不弘裕、才不副意、故爲諸名士所少、而無卓爾優譽。

(64) 『晋書』卷七〇卞敦伝参照。

(65) 『晋書』卷七〇卞敦伝参照。

(66) 明帝深器之、於諸大臣而最任職。

(67) 溫嶠は王敦の乱後に軍号を前將軍に進められているが、その本官は明帝の死去に至るまで丹楊尹のままであった。

『晋書』卷六七溫嶠伝、万斯同「東晋將相大臣年表」参照。

(68) 『晋書』卷七三庾亮伝参照。

(69) 壬午、帝不忿、召太宰西陽王奕・司徒王導・尚書令卞壺・車騎將軍郝鑒・護軍將軍庾亮・領軍將軍陸曄・丹楊尹

溫嶠竝受遺詔、輔太子。

- (70) 明帝即位、以慕容室元老、特爲之拜。慕容縱兵士劫鈔、所司奏免慕容、詔不問。

- (71) この他『晋書』卷五九 汝南王亮伝附南頓王宗伝に、

「(宗) 與虞胤俱爲帝所昵、委以禁旅。宗與王導・庾亮志趣不同、連結輕俠、以爲腹心、導・亮竝以爲言。帝以宗戚屬、每容之」とあるように、慕容弟の南頓王宗、元帝の外戚の虞胤などは明帝の寵愛を受け、さらに「輕俠」と結び、王導・庾亮より非難されていたが、明帝は(特に宗に關して「戚屬」であることを理由にこれを許していた。『晋書』卷九三 外戚伝 虞胤条も参照。

- (72) 『晋書』卷六七 郝鑒伝参照。

- (73) 東晋の中央軍については、張金龍「東晋禁衛武官制度」(同氏著『魏晋南北朝禁衛武官制度研究』中華書局、二〇〇四年、上冊三〇一―三四七頁) 参照。

- (74) 『晋書』卷七七の本伝に、「帝不豫、曄與王導・卞壺・庾亮・溫嶠・郝鑒竝授顧命、輔皇太子、更入殿將兵直宿。遺詔曰、『曄清操忠貞、歷職顯允、且其兄弟事君如父、憂國如家、歲寒不凋、體自門風。既委以六軍、可錄尚書事、加散騎常侍』」とあり、陸曄は顧命に指名されると同時に、殿中に入つて兵とともに宿直している。なお当時領軍將軍

と同じく中央軍の將軍であつた護軍將軍には庾亮が就任し、左衛將軍・右衛將軍には明帝の寵臣であつた南頓王宗・虞胤がそれぞれ就任していた。

- (75) 『晋書』卷六 明帝紀 太寧三年八月条参照。

- (76) 『晋書』卷七三 庾亮伝参照。

- (77) 明帝は旧東宮官属を重用したが、六朝期を通じて、東宮官属の地位は概して高く(閻步克『中国古代官階制度引論』北京大学出版社、二〇一〇年、二七九―二八〇頁参照)、貴族が多く就任した。明帝が皇太子時代に東宮において關係の良好であつた官属の多くが北來貴族であり、結果として江南貴族制を否定し得なかつたのは、こうした背景も一因であつたと考えられる。

- (78) 『晋書』卷五九 汝南王亮伝附西陽王羨伝、卷七三 庾亮伝参照。

〔付記〕本稿校正中に、趙立新『西晋末年至東晋時期的「分陝」政治——分權化現象下的朝廷与州鎮』(花木蘭文化出版社、二〇〇九年) の存在を知つた。本稿の叙述に活かせなかつたことを反省すると同時に、趙氏にお詫び申し上げたい。読者には趙氏著書を合わせて読まれたい。

(京都大学大学院文学研究科博士後期課程)